

「つなぐれ！ 広がれ！ ふるさと米」

～米作りにかかる三浦さんの思いに迫り、ふるさとの未来を考える～

4月～12月(60時間)

1 はじめに

昨年度「ゆめ人」としてお世話になった方のなかから、田んぼを学校に貸してくださる三浦紹夫(つぎお)さんに焦点をあて、三浦さんとの協同的な学習を進めていくことで、子どもたちを育てられないかと考えた。米作りをともにする三浦さんの地域を大切にすることを知ること、地域が抱える問題に気づき、自分自身のこととして考え、社会の一員として自分にできることを探し、行動を起こせるようになってほしいと考えた。【ESD】

三浦さんは、学区の農業が持続発展していくことや地域の人々と子どもたちが積極的に関わることを大切にしたいと強い願いをもち、活動を続けてきている方である。米作りを通して三浦さんと関わることで、米作りの苦労や食の安全のみでなく、先祖から受け継がれる大切な水田のこと、この地域でしか栽培されていない貴重な米(ミネアサヒ)を守っていくこと、また、高齢化が進む豊富学区の農業の問題に気づき、自分たちのふるさとの魅力や抱える問題について自分事としてとらえ、なんとかしたいと切実に考え、行動していけるのではと考えた。

この単元を通して、ふるさとは様々な困難を乗り越え守り受け継がれてきたものがあることを知り、自分もふるさとを守る一員であることを認識し、何か役立とうという心をもってほしい。【ESD】

2 手だて

手だて①「ひと」「もの」「こと」とのふれあい

単元を通して、田んぼの先生として、幼少より稲作と関わり、現在に至るまでの水田や農業の変化、今も利用されている古い水路やため池についての知識をもっている三浦さんとの関わりを大切に単元の構成し(ひと)、この地区で育てられる貴重な品種「ミネアサヒ」について知る。

(もの) また、学区の米作りの特徴や抱える問題点について考える機会を作る。(こと)

手だて② 思考ツールの活用

体験活動や調べ学習のまとめに、思考ツールを活用し、自分の考えを整理する。また、個人での思考ツールを使ってのまとめを、グループや全体で取り上げ、多面的、総合的に考えを深める機会を作る。

3 実践

(1) 手だて①「人」「もの」「こと」とのふれあいから

田植え体験、稲刈り体験(ひと、もの)

代かきする様子を三浦さんに見せていただいた後、いよいよ田植えを体験させてもらうことになった。この活動には学区の福祉委員の方や保護者の方にも協力をしていただ

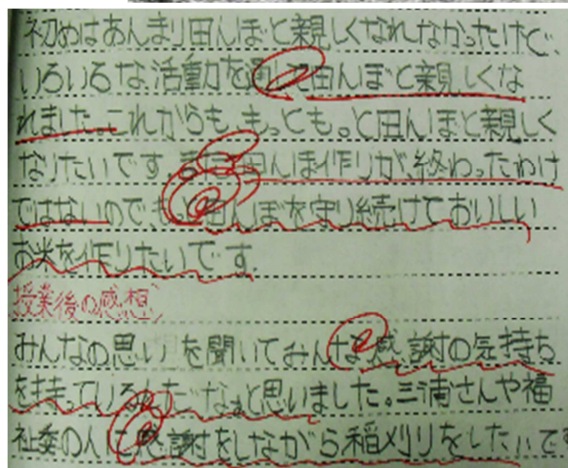


田植えをする児童

いた。児童Aは、「みんなで協力して無事に終わることができてよかった。三浦さんに90点もらった。ミネアサヒやもち米がおいしくできるといいな。三浦さんや福祉委員の人と一緒に食べたい。

1週間に一回は田んぼの様子を見に来れるといい」と記し、ミネアサヒへの愛着が生まれていることや米作りは協力する人がいないと大変であるということへの気づきを読み取ることができる。

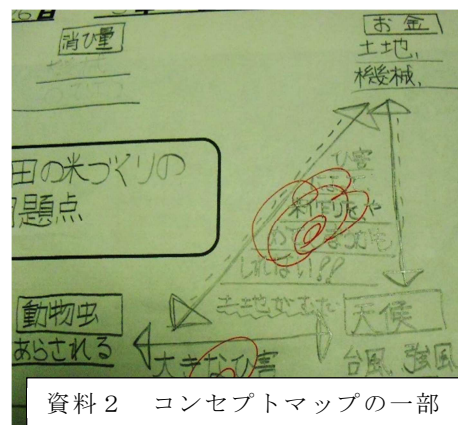
また、もち米の収穫を見た後、ミネアサヒの稲刈りに向けた児童Aの思いには、「初めはあまり田んぼと親しくなれなかったけど、いろいろな活動



を通して田んぼと親しくなりました。…中略…田んぼを守り続けておいしいお米を作りたい」と記した。さらに、稲刈りに向けての話し合いでは、三浦さんに多くのことをやってもらっていたことに気づき、「みんなの思いを聞いて、三浦さんや福祉委員の人に感謝をしながら稲刈りをしたい」（資料1）と書き、稲刈りを通して、三浦さんへ感謝の思いが深まったことが分かる。

（2）手だて② 思考ツールの活用と手だて①の「こと」から額田の米作りの問題について考える

夏休み、実り始めたもち米がスズメに食べられる被害が起きた。児童Aは、調べ学習で田んぼを守る「レスキュー」グループに所属しており、鳥よけの風車などを作り何とか被害を減らそうとした。また、社会科の学習で、米の消費量が減っているなど米作りの問題を知り、額田の米作りの問題について調べることとなった。児童Aは、額田の抱える米作りの問題について、思考ツール「ボーン図」を使って、動物の害



があることや継ぐ人が少ないことを挙げた。ボーン図を使うことで、多面的に物事をとらえることができたと感じた。さらに、それぞれの問題にはつながりがあることに気づかせるため「コンセプトマップ」を用い、さらに情報の整理をした。児童Aは、動物の害により、収入が減り、米作りをやめてしまうと、耕作放棄地となると問題がつながっていると気づいている。（資料2参照）その後、コンセプトマップをもとにした話し合いで、後継者がいないこと、消費量が少ないこと、宅地化が進むこと、動物の害、お金、ミネアサヒがなくなることが挙げられ、それぞれがつながっていることが明らかになった。児童Aは、「人の意見を聞いて、問題点でいろいろなつながりがたくさんあるんだと思

人の意見を聞いて問題点でいろいろなつながり
がたたくさんあるんだと思いました。やはりしがたくさん
あつたので、他にもたくさんの問題点がありそうだと
思いました。だから米作りもたくさんの問題点か
あつて大変だと思いました。私たちも三浦さんや福
祉委員の方々に米作りをやっていて大変だけれども
大変なところあるんだと思いました。問題点だけ考えて
いたけれど、つながりなことを考えると昔は機械
などはない時代だから、大変な問題点かたくさん
あつたんじゃないかなーと思いました。ミネアサヒは
お米のこと初めて知り、私たちがお米を育て
ているんだなと思いました。

資料3 児童Bの額田の米作りの問題まとめ

いました。…中略…三浦さんや福祉委員の方々とも米作りをやっていて大変だったけど、もっと大変なことがあるんだと思いました」（資料3）と書き、友達の意見と自分の考えを共有することで、新たな深い気づきに至ったことが分かる。しかし、まだ、それをするのが自分たちである言う意識には達していない。さらに、ある児童は、授業後の感想の中に、「どうして豊富の子どもたちと米作りをしているのか」という疑問を記していた。そこで、この疑問を予想し話し合うことで、米作りや地域の問題をより自分事として考えることができるのではないかと考える。

4 実践を振り返って

手だてとして、地域講師として三浦さんに焦点を当てたことで、児童は、米作りを通して、これまで気づかなかったふるさとの魅力や抱える問題について新たな気づきに至った。さらに、その後の話し合いで、「三浦さんがどうして子どもたちに米作りを教えているのか」について話し合うことで、地域の方の願いに触れ、自分たちの暮らすふるさとが様々な人の願いにより守り、受け継がれてきていることを感じられた。そして、ミネアサヒを使った料理を考えるなど、自分たちにできる活動に取り組み始めている。また、思考ツールを利用することで、体験学習で得た情報を視覚的に分類したり、整理したり、比べたりすることで、次への課題が見つかり、学習意欲を持続することができた。まだまだ、思考ツールについては、こちらから与えたものを使っているが、自分で情報を整理するにあたってどの思考ツールを使うかを選ぶ力には至っていない。今後、これまで使ってきたものを自分で取捨選択する機会を設け、発信活動へとつなげていきたい。